

適当な話

ホムンザルド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

個人的に書きたくなったのを書きます。

もう一つ、自分が書いている話があるんですが、艦これもダクソも下火になってきてる上に色々言わされましたので、こっちをメインに書くことにします。要望があれば向こうも書くかも

目

次

グラブル

ヤンデレ

ユグドラシル

1

グラブル ヤンデレ ユグドラシル

「ここはとある空域。団長であるグラントとロゼッタがたまたま同じ部屋にいて話しているときにユグドラシルが入ってきたのだ。

「あ、ユグドラシル。おはよう」

「おはよう、ユグドラシル。今日も良い天気ね」

「――♪」

「ねえ、ユグドラシル。最近随分と機嫌が良さそうだけれど、何かあったの？」

「――？」クビカシゲ

「いえ、端から見ていたら最近、ずっと幸せそうだつたから何かあつたのかつて思つただけよ」

「あ、この前ビィがオイラの好きなリングでジュース作つたからあげるぜつて言つてたから、その時からじやないかな？」

「あら、そんなことがあつたのね。」

「そ、そ、そ、う、た、し、か、一、・、・、思、い、出、し、た。こ、の、前、の、買、い、出、し、に、僕、と、ビ、イ、と、ユ、グ、ド、ラ、シ、ル、で、行、つ、た、ん、だ、よ。そ、し、て、商、店、街、を、通、つ、て、る、とき、に、リ、ン、ゴ、專、門、店、つ、て、の、が、あ、つ、て、さ。」

「そ、そ、う、い、う、店、も、あ、る、の、ね、・、・、・、続、け、て、？」

「うん、そこで色々なリングの試食が出来たんだけど、ビィが張り切つて全種類食べたんだよ。そこでいつもカタリナが買ってきてくれているリングより美味しいものがあつたらしくてさ。」

「ああ、いつも林檎がいっぱいあると思ってたらカタリナが買つてきてたのね。あの子はビィが好きだから喜んでもらおうとしてるのね。」

「かもね。僕もビィが好きなんだけど、ここまでビィが喜んでいるの初めて見てさ、思わず僕も幸せになれたしさ。」

「団長さんもビィが好きなのね、昔から一緒にいてもふとしたことで好きになるのはよくあることだから。」

「そ、そ、そ、う、い、う、意、味、で、ロ、ゼ、ツ、タ、の、こ、と、も、好、き、だ、よ」

「ありがとう、私も団長さんの事が好きよ」

「ははっ、ロゼッタからそういうことを言わるとなんだか照れる…ユグドラシル？」

「ああ、ごめんなさい。三人でいるのにずっと二人だけで会話してたら寂しいものね。」

「え、違う？」

「リンゴの話をしていたからきつとまたリンゴのジュースが飲みたくなったんじやないかな？」

「ああ、かもしれないわね。団長さん、もし良かつたら作ってきてもらえないかしら？」

「うん！ それぐらいお安いご用だよ！」

「今は… 確かジー・タちゃんがキツチンを使つてのはずだけ。恋人だからつてイチャイチャしたりしないようにな？」

「ははっ、分かっているよ。きっとカタリナもいるだろうし、お姉様と一緒にじやないと嫌ですわって言つてヴィーラも一緒にいるさ」

「かもしれないわね。私達はここで待つてるわ」

「うん、じゃ、今作つてくるからユグドラシルも待つてね」ドアガチャ

ロゼッタ達がいる部屋に戻ろうとしたとき、ロゼッタの悲鳴と何かが潰れる音がした。

その悲鳴や音はロゼッタ達がいた部屋からだつた。

「ロゼッタ！ だいじよ… う…」

言葉を失つた。床には大量の血と何かの肉片。そして薔薇が落ち

ていた。

誰かが立っていた。ロゼッタを殺した奴だろうか。
足下からゆつくりと顔を上げていくと……。

「… ユグドラシル？」

「—————♪」

幸せそうな笑顔を浮かべて、ユグドラシルがそこに立っていた。
「ね、ねえ…。ロゼッタは、ど、どこ？」

「—————？」

不思議そうに首をかしげ、まるでここにゴミがありますよ、とでも
いう感じで肉塊に指を指した。

ゆつくりと、可愛らしくペタペタと足音を鳴らしてこちらへ向かつ
てくる。

こんな状況で無ければきっと見惚れていたかのような笑顔と共に。
「—————♪」

キュツと、袖を掴まれる。その手は実際には血には濡れていもないも
のの、目には血で濡れたように見えた。

「う、うわあ!!!」

パシンッと、綺麗な音が響く。

目の前の彼女は信じられない、とでもいうような表情を作り、首を
振って、また笑顔を浮かべて僕に寄り添つてきた。

「ね、ねえ、ユグドラシル…。これは、わ、悪い、悪い夢… だよね？」

無言でどんどんと僕に向かつて歩いてくる。

普段の鈴のような声もなく、ゆつくりと。目の前に恋人がいるから
甘えに行こうともいうような雰囲気で。

それに反して僕の身体と脚は後ろに下がっていく。

「—————？」

どうして逃げるの？

目がそういう風に僕に訴えかけてきたような気がした。

「な、なんでロゼッタを、こ、ころ、殺した… の？」

「—————」

無言でゆつくりと。ペタペタと足音を鳴らして。

ドン、という音が僕の背中から聞こえたと同時にこれ以上身体も脚も動かなくなつた。

「…………？」

なんで逃げるの？

「…………」

ゆっくりと微笑んで、僕の頭を抱きしめて、撫でてくれる。

その手は温かくて、今僕が見ているものは悪夢で。私だけは貴方の味方だよ、とでもいうように。優しく、優しく、深く、慈母のようにゆっくりと頭を撫でてくれる。

「ああ、夢だつたんだ……。」

「…………♪」

こくり、と柔らかい笑顔で頷いてくれる。

きっと、僕はまだベッドの上で、ルリアやビイと一緒に寝ていて、悪夢を見ている最中に彼女が助けにきてくれたんだ……。

「……ごめんね、ユグドラシル……眠く……なつ……て、」

「…………」

瞼に手をそつと寄せて、目を閉じてくれた。

今も誰かの悲鳴が聞こえているけれど。これは夢。

夢から助けてくれた彼女は、きっと……。

「おやすみ……ユグドラシル……」

そう言つて眠りについたグラントの傍には、今も同じ船に乗つていた者を殺しながら笑顔を浮かべていたユグドラシルがいた。

その瞳には深い、深い闇を伴いながら。

ある日、大型船が突然墜落するのを見かけた人がいた。

シェロカルテが大急ぎでその船を救出に向かい、成功したが中には沢山の死体と血が。

そして、同じ船に乗つていたはずの顔なじみのグラントと、星晶獣のユグドラシルがいなかつた。

彼女は全空域に彼を探すよう手配をしたが、見つかることは無かつ

た
。